



羅針盤

2015年度 第10号
都立豊多摩高等学校
進路図書部

2015（平成27）年10月5日発行

記念祭に続き、体育祭も終わった。どちらの行事も、準備から実施まで、年ごとの質の向上を指摘する声が多い。毎年初期化しては、こうはならない。前年度の経験を次の年度に活かしてきたことのためである。その繰り返しが、新しい伝統になりつつある。クラスでひとりかふたりでいい。来年の記念祭はこうしよう、体育祭はこうしようと、今から考えはじめよう。

働きアリの法則が気になったので、長谷川英祐『働かないアリに意義がある』（メディアファクトリー、2010）を読んだ。タイトルどおり働かない働き蟻の存在意義を説いている。道に迷った蟻が近道を見つけたり（42～6頁）、よく働く蟻が力尽きたときに働きはじめる（72～5頁）という。記念祭や体育祭で働きそこねた君は、いざというとき働こう！

前号の宿題。正解への端緒はすべて前号にある。読んでいない人は、前号を読んでほしい。バックナンバーは、進路室の前の廊下にある。ホームページでも公開している。それでは、理解を進めていこう。

現代思想の内田樹は、努力するのは、「自分のため」ではなく「他の人のため」の時であるとし、プロ野球の王貞治は、「他の人のため」よりも「自分のため」のほうが努力につながるという。一見正反対だが、どちらも正鵠を得ているとすれば、次のどちらかのパターンが正しいことになる。

- A パターン＝ ①王の言う「自分のため」 ②「他の人のため」 ③内田の言う「自分のため」
B パターン＝ ①内田の言う「他の人のため」 ②「自分のため」 ③王の言う「他の人のため」

努力を継続的に駆動するうえで、王の言う「自分のため」が最も効力があるならAパターン、内田の言う「他の人のため」のほうが最適ならBパターンである。正しいパターンと、なぜそんな違いが生じるのかが理解できれば、片方の意見しか知らないばあいよりも、確実に遠くへ行くことができよう。

自分のためか 他人のためか

手がかりとして、心理学で言う「アンダーマイニング効果」が想起される。

「undermine」は、ここでは「…を徐々に衰えさせる。知らぬ間に弱らせる」の意味。意識の内発的動機づけによって行われた行為に対して、報酬などの外発的動機づけを行うことによって、動機づけが低減する現象を「アンダーマイニング効果」と言う。よく聞く例は、無償のボランティア活動をしている人に僅かながら報酬を渡したところ、かえって作業効率が下がってしまった、という例である。ボランティアの動機は、自分の意志から出発するので内発的、報酬による動機は、他者からもたらされるので外発的ということになる。内発的な動機によって生じたモチベーションが、外発的な動機づけによって、無意識のうちに損なわれる現象である。近年、行動観察だけでなく、脳活動の変化として確認された（時事通信2010年11月16日）。

勉強に応用すれば、親が子どもに「〇点取ったら〇〇買ってあげるわよ」などと条件を出すのは逆効果ということになる。一浪で難関大学に合格した卒業生が、「こんなふうにやるといいはずだと仲間と相談し、工夫しながら勉強していたときは数学が楽しかったのに、10月ころ、センターを意識した過去問対策に切り替えたとたん、嫌になりました」と報告してくれたことがある。自発的な充実が、外発的な動機を意識することによって低下したのだから、アンダーマイニング効果である。とはいえ、秋まで充実を維持できたのは、確かな成功である。いい取り組みだったと思われる。

内田の言う「自分のため」は「報奨」目的だから外発的動機づけであり、「他の人のため」は無償の行為だから内発的な動機づけといえそうである。「アンダーマイニング効果」の仕組みが成り立つ。が、王貞治

の言う「自分のため」には、報酬を求める気配がない。外発的な目的意識ではないようなのである。

サッカーの宇佐美貴史（ガンバ大阪）が、自分を振り返って「サッカーを楽しむことしかしてこなかったんで、努力はしたことがないですし、練習が終わって家に帰って自主練ができるのも、楽しいからやれるだけで努力じゃないんですよ」と話していた（TBS「情熱大陸」2015年9月13日）。一流の選手が最も充実して努力する精神状態は、そういうものようである。

イチローは、それを言語化している。小久保裕紀に語ったことばである。

小久保は、野球の現日本代表監督。現役時代は走攻守の揃った名選手だった。ダイエーホークス（現ソフトバンク）時代の1995年には、パリーグのホームラン王を獲得した。

名実ともにホークスの4番となった3年目の'96年、小久保はまた長いスランプに陥る。打率も本塁打も伸びない中、オールスターでイチローに再会すると、つい弱音が出た。

「去年ホームラン王を取ってしまったやろ。おかげで次の目標がはっきりしないのよ」

「数字を残すためにやってるんですか。ぼくは野球を通じて、胸の奥にある石を磨き上げたい。数字だけ残っても意味ないと思う」

穴があったら入りたいほどの気分だった。あのイチローの一言があったからこそ自分は成長できたのだと、小久保はいまでも思っている。

（赤坂英一「小久保裕紀を赤面させた2冠王の『覚悟』」（「Number」第836号、2013年9月19日）51頁）

あきはらのあはる

朝原宣治のことばが思い出される。朝原は、選手のスランプを説明して「若いライバルに気をとられ、タイムを意識しすぎたのだと思います。自分にも経験がありますが、タイムを意識しすぎると調子が落ちることがあります」と解説していた（第8号で引用、NHK「アスリートの魂」2012年6月4日）。一流選手にとって、「数字」も「タイム」も、自分の記録でさえ、振り回されてはいけなく、拘泥してはいけなく他者なのである。王の言う「自分」も、イチローの言う「胸の奥にある石」も、外発的な他者性を排除し、内発的な目的意識を研ぎ澄ました「自分」である。

そこには、排他的、利己的な「自分のため」という響きはない。内田の言う「自分のため」とは違う。だから、他者への波及効果という逆説的な結果を生む。イチローの自己探求は小久保を成長させたし、王貞治は「自分のためにやってる人が結果的にはチームのためになる」（第9号で引用、石田雄太「メジャー7年目の境地。」（「Number」674、3/29号）44頁）と述べた。そして、クリスチアーノ・ロナウド（レアルマドリッド）は「誰もひとりでは勝てない。利他主義こそが不可欠なのに、たぶんこれまでの僕は、自分のこと、自分の記録のことばかりを考えていた。今は違う。チームのために働ける選手になった」「与えるものにこそ、与えられるのだということ、僕もようやくわかるようになったんだ」（第5号で引用、「Number」871（2015年2月19日）号、89頁）と吐露していた。とすれば、「他の人のため」のボランティア活動にも「自分のため」という側面があるのではないだろうか。東北の震災の時には、ボランティア参加者が、しばしば「私たちのほうが元気をもらいました」と口にした。その行為を通じて自分を見つめ、「胸の奥にある石」を磨くという意義が生じていたはずである。

というわけで、正解は、「Aパターン」。内田の言う「自分のため」が、報奨のような外発的な動機づけによる利己的な目的を指す。王の言う「自分のため」は、内発的な動機づけによる自己完結的な目的を表し、他者の利益に対して寛容である。両者は対蹠たいせきの関係にある。内田の意見は、働かない若者が働くようになるための処方箋であり、王貞治やイチローの言説は、一流の人間における不屈の精神に触れたものである。

私たちがどちらを目指すべきかは、言うまでもない。

10月・11月は大学の学園祭シーズンです。

この機会を利用して、志望大学や気になる大学のキャンパスに出かけよう。